

椿油に濡れた髪をすっと梳き放って*

—社会主義、女性主義、地域主義、革命家 チョン・チルソン 丁七星の二重叙事研究—

チン・ソニョン
陳善榮** (訳者 鄭享玉)

目次

- I. 初めに： 私たちが社会主義女性革命家を記憶しなければならない理由
- II. 女性としては私だけだった、自叙伝を書く
- III. 私はこういうことをしたい、論評叙事を書く
- IV. 終わりに

概要

チョン・チルソン
丁七星の生涯と思想を追跡する作業は、近代社会主義運動史、女性史、文学史、マスコミ史が交差する地点に置かれている。これまで、丁七星の履歴および思想に誠実に光が当てられてこなかったため、本稿は丁七星という社会主義女性運動家の人生を、年代順に調べた。3・1運動以前～日本留学と共に色々な団体を組織しクスフエ権友会を創立するまで～権友時代～権友会解消以後～解放以後の順に整理し、丁七星の声が生き生きと伝えられるように、彼女の自叙伝から句を直接引用した。丁七星が発表した論評を社会主義、女性主義、地域主義に区分したのは、思想の鮮明性を浮き彫りにするためであり、これを土台に理論と運動を総合化しようとした。

丁七星の人生は、伝統から近代へと進む植民地過渡期を生き抜いた一人の女性のマイクロ史ではない。丁七星自身の存在論的・社会的経験をもとに、現実を冷徹に認識し、闘争的なやり方で当代と拮抗した。これが力強い植民地運動史と重なる時、丁七星の生涯は植民地女性史になりうるのだ。さらに、丁七星は人生の目的意識を社会主義女性運動と講演、

* この研究はアモーレパシフィック財団の学術研究費の支援を受けて行われた。

** 陳善榮, 梨花女子大学国語国文学科 助教授

投稿日：2019年10月22日 審査完了日：2019年12月6日 掲載確定日：2019年12月12日

DOI URL：<http://dx.doi.org/10.17792/kcs.2019.37..251>

論評を通じて無産大衆と共感、疎通しようと努力した人物だ。その努力は洗練されてはいなかったが、少なくとも正直になろうとした潔白な人物だった。疲弊した人生の経験から発生した社会的争点である階級、ジェンダー、組織の問題が強烈な主体意識を生み、それが丁七星という女性革命家の物語を支配している。

キーワード：丁七星、^{チョン・クムジュク}丁琴竹、妓生、社会主義女性運動、女性革命家、地域主義、権友会

I. 初めに：私たちが社会主義女性革命家を記憶しなければならない理由

植民地時代の女性活動家を理念によって左右に色分けし、彼らの諸側面を調べた論文を見ると、左側に位置する女性活動家たちは一つの共通点がある。その共通点は、生物学的条件でも、定着した方向でもない。名前の横にある括弧の中に閉じ込められた疑問符 (?) である¹。右側に位置するキリスト教・自由主義系の女性活動家たちは、誕生と死亡年代が明確に整理され、活動像や歴史の中の座標が明確に記録されたことと対照的だ²。さらに、

¹ キム・ギョンイル 「新女性、社会主義、伝統と西欧理論」 『梨花女子大学アジア女性学センター学術大会資料集』 2005、p3-15

出生年度	社会主義系列	キリスト教／自由主義／急進主義系
1880		キム・ミリサ 金美理士 (1955)
1890	ユ・ヨンジュン 劉英俊 (?)	
1896	チョン・ジョンミョン 鄭鍾鳴 (?)	ナ・ヘソク 羅蕙錫 (1948)、キム・ミョンスン 金明淳 (1951)
1897		ユン・シムドク 尹心惠 (1926)、パク・インドク 朴仁德 (1980)
1898		ファン・シンドク 黄信德 (1983)、パク・スンチョン 朴順天 (1983)
1899	パク・ウォンヒ 朴元熙 (1928)	キム・ファルラン 金活蘭 (1970)、イム・ヨンシン 任永信 (1977)
1900	イ・ドギョ 李德耀 (?)	
1901	チュ・セジュク 朱世竹 (?)	
1902	ホ・ジョンスク 許貞淑 (1991)、イ・ヒョンギョン 李賢卿 (?)	
1904	コ・ミョンジャ 高明子 (?)、キム・ジョイ 金祚伊 (?)、キム・ピルス 金必壽 (?)	チュ・ウンヒ 崔恩喜 (1984)、イ・スクチョン 李淑鍾 (1985)
1905	カン・ジョンヒ 姜貞姬 (?)	ソン・クムソン 宋今璇 (1987)
1906	チュ・ウォンスク 趙元淑 (?)、パク・ホジン 朴昊辰 (1934)	ベ・サンミョン 裴祥明 (1986)
1908	チョン・ナルソン 丁七星、(1957?)	
1909		モ・ユンスク 毛允淑 (1990)

² キム・ギョンエ、「羅蕙錫の女性解放論の実現と葛藤」、『女性と歴史』19、2013、p263-297；キム・ソンウン、「日帝の植民地時期 黄信德の現実認識と運動路線の変化の様相」、『韓国人

1990年代から男性社会主義者に対する研究が量的に増加したとと比較した時、これはさらに深刻な現象だ³。疑問符は今まさにこの場、研究の現実的条件を問いかけ、反省を要求する。

今すぐこの場で、「丁七星」の名前を呼んでみる。近代女性主義研究者、あるいは歴史、文学、マスコミに関連した研究者なら、丁七星という名前を一度は聞いたことがあるはずだ。私たちが聞き知っている丁七星は、どのような地点に位置しているのか？ 丁七星は7歳で妓生になり、20歳前後で朝鮮の5大名妓となった。1919年、3・1運動が起きると「椿油に濡れた髪をすつと梳き放って、一躍民族主義者になった」⁴と云うのだから、妓生の丁琴竹が丁七星に生まれ変わったのだ。暗い夜、長い航海に発つ時、私たちに道案内になってくれた星、北斗「七星」、人生の大きな転換を予告するドラマチックな命名だ。権友会を守っていた女性労働者の友人だった丁七星が経験した組織と現場は、韓国社会主義女性運動史になったが、依然として丁七星は疑問符の中にある。疑問符を感嘆符に、これが本研究の出発点である。

丁七星に関する先行研究は、植民地時代の女性運動史を包括する研究において最初に確認される。1920年代、女性活動を民族主義と社会主義系列に大別し、無産女性の解放を綱領とする女性団体朝鮮同友会と民族解放運動の協同戦線論に基づいて創立された権友会を中心に、丁七星の基本的な活動が確認される⁵。以前の学位論文は植民地時代の女性運動と

物史研究』、23、2015、p283-325；キム・ソンウン、「1920~1930年代の金活蘭の民族文化認識」、『女性と歴史』26、2017、p81-110；ペク・オクキョン、「近代韓国女性の日本留学と女性の現実認識」、『梨花史学研究』39、2009、p1-28；ソン・ミョンヒ、「金明淳に新女性の道を尋ねる」、知識と教養、2017年；シム・オクキョン、「1920年代の韓国女性運動考察：キリスト教系女性運動を中心に」、慶南大学修士論文、2005；オ・スクヒ、「韓国女性運動に関する研究：1920年代を中心に」、梨花女子大学修士論文、1987；ユン・ジョンラン、「日帝下韓国女性の存在形態-1930年代キリスト教女性の活動を中心に」、「国史観論叢」94、2000、p65-102；イム・ヨンシン「私の40年闘争史：建国60周年記念の年を迎えて」、ミンジ社、2008；チェ・ジョンソン、「朴順天の政治リーダーシップ研究」、国民大学博士論文、2008；ハン・ソンヒ、「日帝下朴仁徳の生涯と思想：民族、女性、信仰を中心に」、梨花女子大学修士論文、2016。

³ カン・ミンウ、「金若水キム・ニョクスイの現実認識と民族運動」、西江大学修士論文、2015；キム・ギョンイル、「李載裕イ・ジェヨク、私の時代、私の革命：1930年代ソウルの革命運動」、青い歴史、2007；キム・ジュヒョン、「金周鳳キム・ジョフンの民族運動と社会主義認識」、安東大学修士論文、2009；キム・ジュンヨプ、キム・チャンスン、「韓国共産主義運動史」、清溪研究所、1986；ソ・ギョンソク、「而丁 朴憲永一代記」、歴史批評社、2004；イ・ヒョンヒ、「趙東祐チョウ・ドンウの抗日闘争史：急進的抗日闘争家の一生」、チョンア出版社、1992；チャン・ソクフン、「權五高クワン・オソクの民族運動路線と性格」、『韓国近現代史研究』19、2001、p207-234；チョン・テヨン、「曹奉岩ソ・ボンアムと進歩党：ある民主社会主義者の生と闘争』、フマニタス、2006

⁴ 朴貞愛、「3.1独立運動に飛び込んだ「思想妓生」社会主義運動家として活動」、『ハンギョレ』、2008.8.16

⁵ クォン・ヒョン、「1920-1930年代の「新女性」と社会主義-新女性からプロ女性へ」、『韓国民族運動史研究』、18、1998、p101-128；キム・ギョンイル、「1920-30年代韓国の新女性と社会主義」、『韓国文化』、36、2005、p249-295；パク・ヘラン、「1920年代社会主義女性運動の組織と活動」、梨花女子大学修士論文、1993；ソ・ヒョンシル、「情熱の女性活動家

いう共通した特性に基づいて、より多くの対象を包括して外縁を拡大することに目的があったため、同じ系列内の女性リーダーの個性は薄められた傾向がある。植民地時代の独立のために努力したが、記録から漏れた人物を短いエピソードやイシュー中心に扱った単行本でも少なからず丁七星の名前が目につくが、たいていは好奇心を誘発するプライバシーに焦点を置いたり、「思想妓生」（解語花）という点に集中している⁶。

最近行われた個別研究であるノ・ジスンの研究は、丁七星の生涯と活動を単一論文にまとめた初めての試みという点で意義がある。ノ・ジソンは、丁七星の政治的覚醒において重要なキーワードとして「感情」を抽出する。丁七星は妓生としての不当な現実の中で、自分も平等な人間であることに気づき、社会主義者としてその不当さを解消しようと努力したと整理した⁷。ノ・ジソンは丁七星だけの経験と覚醒が、他のエリート女性社会主義者たちと弁別されることで、それが権友会解消以後にも、丁七星の人生を独立的なものとして鑄造したと判断した。

パク・スンソプの論文は、社会主義系女性運動の普遍的特徴と、その中に内在した特殊性を最も集約的に表わすことができる人物である丁七星に注目し、1920~30年代の活動を把握した。2度にわたる東京留学で、ベーベルと山川菊栄の社会主義女性運動論を受け入れ、朝鮮女性同友会の結成を通じて社会主義女性運動界の統合を牽引し、評価した。1929年、権友会中央執行委員長に選任され、これまでの運動方式を権友会という全国的組織レベルで具現しようと努力し、宣伝組織の強化と労農部新設などを通じて女性の無産階級性の自覚を強調する女性解放論を堅持したと叙述した⁸。パク・スンソプの論文は、これまで多少不十分だった丁七星思想の履歴を、東京留学から出発して権友会解消に至るまでの行

許貞淑、「『女性と社会』3、1992、p198-222；シン・ヨンスク、「日帝下韓国女性社会史研究」、梨花女子大学博士論文、1989；ヤン・マンウ「権友会抗日武装組織的女性運動主導（独立運動秘史11）」朝鮮日報1995.8.5；オ・スクヒ、「物語女性史（8）権友会」、京郷新聞、1991.3.25；チャン・ヨンウン、「生存と作文：女性社会主義者の自分語り」、『比較韓国学』25、2017、p71-95；チャン・インモ、「1920年代権友会本部社会主義者たちの女性運動論」『韓国史研究』142、2008、p367-419；チョ・ギョンミ、「1920年代、女性団体運動に関する研究-社会主義女性団体を中心に」、淑明女子大学修士論文、1990

⁶ キム・ギョンイル他、『韓国近代女性63人の肖像』、韓国学中央研究院出版部、2015；キム・ソンドン、「花東も墓もない革命家たち」、朴鍾哲出版社、2014；キム・ジュンソン、イ・スミン、「一体愛とは何だというのですか？：大邱の3人の妓生「琴竹 丁七星」、「蟾柯 玄桂玉」、「道天 康明花」の物語」、ソトン、2015；キム・ヒョンモク、「丁七星、「思想妓生」から女性活動家に変身する」、「独立記念館」346、2016；大邱史学会編、「嶺南を知れば韓国史が見える」、青い歴史、2005；ソ・ジョン、「植民地時代の妓生研究」、『韓国古典女性文学研究』10、2005、p433-464；ソン・デギョン編、「時代を先取りした人々」、ソニン、2014；シン・ヨンスク、「女性が女性を歌う」、ヌルプムプラス、2015；安載成、「失われた韓国現代史」、人文書院、2015；イ・ヌンファ著、『朝鮮解語花史』、イ・ジェゴン訳、東文選、1992；チョン・ウニョン、「朝鮮の娘、銃を持つ」、人文書院、2016；ピョ・ハンニョル、『（教科書に載せられなかった）エピソード独立運動史』、アルフィー、2017

⁷ ノ・ジソン、「ジェンダー、労働、感情、政治的覚醒の瞬間：女性社会主義者、丁七星の生涯と活動に関する研究」、『比較文化研究』43、2016、p7-50

⁸ パク・スンソプ、「1920-30年代 丁七星の社会主義運動と女性解放論」、『女性と歴史』26、2017、p245-271

間を綿密に把握し、これを通じて丁七星だけの独自性を他の社会主義女性運動家たちと弁別する形を取った。反面、丁七星の女性解放論をもう少し具体化できる資料が不足しており、研究時期が1930年代までに限られているため、権友会解消以後の丁七星の変化など生活と思想の全貌を確認するのに多少もの足りない感がある。

これまでの研究は、丁七星の生涯と思想という総合的な研究を遂行するための当為論的証拠である。これらの研究を通じて仮説を立て、方向と座標を設定することができたため、本研究は次のような研究目標を持つ。本稿の根本的な研究目標は、丁七星という社会主義女性活動家に対して新しく光を当てることだ。丁七星の自分語りの文章は、女性として主体的に自分を確立する過程で発見する民族、女性、階級、組織に対する深い認識の結果だった。この時の叙事は二重的意味だが、植民地時代を社会主義女性運動家として生きていた丁七星個人の「自分語り」と彼女の「思想的作文」としての叙事に対する考察だ。

まず本論の第一章では、女性の私的な個別叙述を自分語りの側面から見ていく。研究方法論としての自分語りとは、話者が自分自身に関する話をそれが事実だという前提に基づいて陳述し、自分の人生を全体として省察し、その意味を追求する特徴を持つ作文様式だと言える。したがって、自分語りは単一のジャンル概念ではなく、多様なジャンルを包括する。女性史の伝統において、自分語りは女性の存在論的位置と現場を再構築する実証的性格とともに、当代社会で発話できなかった多様な女性の声を再現する重要な史的価値を持つようになる⁹。

丁七星には、豊かな自分語りが存在してはいないが、随筆、回想記、アンケート調査に対する応答などを中心に、散らばった自叙伝を収集し定量化する作業が忠実に行われなければならない。植民地の矛盾を克服するための批判的挑戦と革命の実験は最大の話題であり、これに対する成功と失敗・挫折は、丁七星の自分語りに記録されているため、丁七星の人生自体は探求に値するテキストになる。本稿は丁七星の自分語りを年代順に構成し、小見出しは丁七星の声が生々しく伝えられるように自叙伝の句を直接引用した。

本論の第2章では、丁七星の思想に対する総体的な理解のために、論評という叙事を通じて組織を代弁する思想の肉声の全貌を把握しようと思う。丁七星は社会主義女性運動陣営の代表的な政客であり論客だった。丁七星が残した40編余りの論評は、植民地時代の女性として生まれて生きた女性的経験を土台に反省し覚醒した結果だ。丁七星が発表した論評を中心に、彼女の思想を社会主義、女性主義、地域主義という主題に分類し、これを土台に理論と運動を総合化しようとした。論評で確認される丁七星の思想は明確に弁別されないが、思想の鮮明性を浮き彫りにするために5節に分けた。

⁹ パク・ヘスク、チェ・ギョンヒ、パク・ヒビョン、「韓国女性の自己叙事(1)」、『女性文学研究』7、2002、p323-349; パク・ヘスク、「女性自己叙事体の認識」、『女性文学研究』8、2002、p7-30; イ・ユミン「女性主義 自己治癒の方法を模索: 自己告白作文を中心に」梨花女子大学修士論文、2016; イ・ジュミ、『女性の自己叙事自己表現』、ジェイアンドシー、2009

II. 女性としては私だけだった、自叙伝を書く

1. 私の体が花柳界に投げ込まれている時（1897-1919）

丁七星は1897年大邱^{テグ}で生まれ、8歳で妓生になり、ソウルに上京して丁琴竹という技名で22年を暮らした¹⁰。この時期、妓生たちがおよそ12～3歳で養女として売られ、妓生学校に入ったことを考えると、早い年齢で妓生になったわけだ。先行研究を参考に見ると、丁七星と関連していくつかの説と誤りが確認されるが、これを正さなければならぬだろう。丁七星の技名と券番がそれだ¹¹。

丁七星の妓生生活に関する具体的証拠は、『朝鮮美人宝鑑』¹²で確認された。本に載せられた大正券番の妓籍によると、丁七星の技名は丁琴竹だ。琴と竹、詩と音楽の両方に堪能だった彼女にふさわしい名前だ。丁七星は当時、朝鮮随一の妓生組合だった大正券番に籍を置いたが、漢南券番を作るにあたり先頭に立って、三南（忠清道、全羅道、慶尚道）出身の妓生たちが定着できるように助けたりもした。1918年当時、21歳の年齢で、原籍は慶尚北道大邱府であり、現住所は京城府清津洞77番地になっていた。技芸としては、時調、南中雑歌、カヤグム散調、並唱、立唱、座唱、宮廷舞踊12種、囲碁が記されている。

ほとんどの妓女が2、3種類の技芸を並べたのに対し、丁琴竹は2行にわたって8つの技芸が書かれており、特に踊りよりは、カヤグム（伽耶琴）と歌唱に長けていたものと見

¹⁰ 思うに、私は今から30年前、当時の李朝末期、偶然の機会に当時の大邱觀察使の宴会を見物することになり、その妾の地位を羨ましがって、すぐに隣の妓生の家に通って勉強だと始めたが、天才だと言われると、やむを得ず両親がその道に出すことになった。その時8歳だった。（丁七星、「著名人物一代記」、『三千里』9巻1号、1937.1.）

¹¹ 表1. 丁七星上京時期、技名、券番に関する先行研究

単行本	上京時期		技名		券番	
	1908年	1916年	錦竹	琴竹	漢南券番	大正券番
『韓国社会主義人名辞典』（1996）			○		○	
『嶺南を知れば韓国史が見える』（2005）		○			○	
キム・ジュンソン論文（2011）		○		○	○	
『時代を先取りした人々』（2014）			○		○	
『失われた韓国現代史』（2015）			○		○	
『朝鮮の娘、銃を持つ』（2016）		○	○		○	
ノ・ジソンの論文（2016）				○		○
パク・スンソプの論文（2017）		○	○		○	
文化コンテンツドットコム		○		○	○	

¹² 朝鮮研究会編、『朝鮮美人宝鑑』、イ・ジンウォン解題、民俗院、2007；ホン・ヨンシン、「1910年代ソウル地域券番研究：技芸を中心に」、中央大学修士論文、2010；イ・ソルヒ「『朝鮮美人宝鑑』に現れた妓生組合と券番に関する考察、韓国芸術総合学校 伝統芸術院修士論文、2009

られる。また、大正券番 182 人の妓生の中で、唯一囲碁が技芸に書かれているのがまた特異点といえるが、丁琴竹は当時「囲碁が上手い妓生」として名を馳せたという。

丁七星は自分が妓生だったことを隠さなかったが、妓生として記憶されることを望まなかったため、妓生生活に言及することに非常に慎重で、人生でも極度の潔癖性を見せた。丁七星が、分断以前の時代にカヤグム、南道ソリで有名になったことから、どの会席でも一等賞は独り占めしそうなのに、才能を絶対見せないという不満の声や¹³、生活苦に苦しみながらも梨花専門音楽科からカヤグムの教授を要請されたものの、断ったこと¹⁴からもこのことが分かる。

丁七星が自分の過去について回想した文は十数編余りあるが、「2、3ヶ所の名門大家の小室になるかと思えば、ある官僚の嫁になったこともあった」¹⁵という記録は、彼女の平坦ではなかった人生に対して同情の視線を抱かせる。だが、「数奇な生活」に対する記憶が「恨めしくて涙ぐましい」反面、「嬉しくて愉快的」記憶も共存するという事実は異彩を放つ。特に男装をして乗馬をした記憶はとてさわやかな気分を与えたが、当時乗馬を学んだ理由も活動写真のヒロインたちのように「馬も上手で喧嘩も上手で朝鮮で有名な女丈夫」¹⁶になりたかったという所感は丁七星の気概をうかがわせる。丁七星にとって妓生という位置は開放性、ダイナミズムと共に新しい主体性を模索できる契機になったと見られ、好奇心旺盛で賢かった丁七星はこの時間を無駄に過ごさなかった。

妓生のイメージは朝鮮の男性的な「伝統」と新しく訪れた「近代」によって歪曲されたまま大衆に強要され、さらに日本の植民地を経て性的消費の対象にまで転落してしまった。したがって、現代の韓国社会で妓生という存在は、すでに消滅した前時代の遺物として認識された¹⁷。しかし、妓生たちは押し寄せる近代化の洪水の中に、ただ自分を任せておきはしなかった。むしろ近代文化と通称される西欧的な新文物を主体的かつ積極的に受け入れ、ひいては保守的な当時の時代的流れを打破し、開化のための先駆的な役割を果たした¹⁸。

このような側面で丁七星はその最前線にいた。1919年、3・1運動をソウルの真ん中で経験し、「深い意味は分からないが、鐘路交差点に立って眺める若い胸は興奮にあふれる熱い涙を流しながらその後を追って」歩いた丁七星は、「椿油に濡れた髪をずっと梳き放って、一躍民族主義者になった」¹⁹。

¹³ 「名男名女 年末隠し芸余興競技大会」、『別乾坤』10、1927.12。

¹⁴ 「聞いた風月記」、『三千里』7巻8号、1935.9。

¹⁵ 丁七星、「著名人物一代記」、『三千里』9巻1号、1937.1。

¹⁶ 丁七星、「義憤公憤心談構想 最も痛快だったこと：男装して馬を走らせる時」、『別乾坤』8号、1927.8。

¹⁷ チョン・ヘヨン、「近代の成立と妓生の没落：近代文学に現れた妓生のイメージを中心に」、『韓中人文科学研究』20、2007、p235-265。

¹⁸ キム・ジュンスン、「近代化の担持者妓生 I-大邱地域文化コンテンツとしての可能性」、『韓国学論集』43、p161-194。

¹⁹ 朴貞愛、前の記事。

2. 血の通った人間なら、誰でも飛び込まずにおけない (1919-1927)

この時期は 3.1 運動で大きな悟りを得て、妓生から思想運動家への変身がなされた時期で、丁琴竹から丁七星への変化が敢行された激動期だ。丁七星は 1922 年、英語圏の国に留学するために英語を学習する目的で日本に留学し、東京の英語講習所で修学する。翌年、帰国して故郷の大邱に帰って物産奨励運動に参加し、同年 10 月に李春壽イ・チュンスと共に大邱女子青年会創立を主導、執行委員として活動した。1924 年 5 月、許貞淑ホ・ジョンスク、鄭鍾鳴チョン・ジョンミョンなどと共に朝鮮女性同友会を結成し、一般婦人を対象に同志の糾合に努力した。1925 年、慶尚北道単位の思想団体である四合同盟を結成する。

この時、再び日本に渡って女子技芸学校に入学し、李賢卿イ・ヒョングン、黄信徳ファン・シンドクなどの留学生たちと共に思想団体である三月会を組織、日本の社会主義女性活動家山川菊栄と交流する²⁰。女子学生学興会幹事として活動する一方、三月会で『女性と社会』というパンフレットを発刊することに力を注ぎ、当時活動していた女流雄弁家たちが引退を準備していた時に「その後を継いで演壇に毎日のように上がって演説をした者は、女性としては²¹丁七星だけだった。これらの経験は、その後各団体を代表する演説者としての基礎となった。東京留学時代の意義深い思い出として、左翼方面の書籍を熱心に読んだこと、その中でもベーベルの『婦人論』に大きな感動を受けたという。この本は家族や社会の中での女性の地位と役割を社会経済的土台を中心に分析した本で、女性解放がすなわち人間解放の前提だと主張しているが、丁七星はこの本を朝鮮女性に必ず読んでほしかったという。

二度の渡日はロマンチックな感受性に浸った子どもっぽい行動ではなかった。丁七星は幼い頃に大変苦勞をし、10 代後半に色々な社会現実を自ら体験したので、とんでもない空想やロマンチックな甘い夢のようなものは見たことがなかったという。かなりな年齢になって初めて入った学校だったので、ひたすら学生時代を価値があり有益なものとして過ごすために努力した。

丁七星は、自分が厄介な目に遭う度に、男として生まれたら、あるいは百万長者の一人娘として生まれたらという空想をしたと告白した。だが、このような考えは強固な意識が固まる前であり、社会に対する自身の地位と義務を悟ってからは、血の通った人間ならば誰でも飛び込まずにおけない、その「仕事」に全身を捧げると誓った²²。そのことは二度の東京留学をきっかけに、自然的存在から社会的存在に生まれ変わることを指しており、その存在論的変転から、社会主義女性運動への邁進を指向点にした

²⁰ 宋連玉、「山川菊栄と黄信徳：帝国日本と植民地女性リーダーの出会いとすれ違い」、『女性と歴史』15、2011、p159-178

²¹ 丁七星、「女流文章家の心境打診、「現実」を見つめようとする女流評論家」、『三千里』7 卷 11 号、1935.12

²² 丁七星、「私が生まれ変わったら？ 金持ちもみんな嫌いだ、やはり今のような働き手で」『三千里』1 号、1929.6

1926年、日本に滞在して三月会幹部の名で「新女性とは何か―価値大暴落の過ちは誰に」、
「真の自由への道」を発表し、本格的な社会主義的論評を書き始める。6月前に帰国して
新幹会京城支部設立に参加し、幹事および新幹会本部の議案作成部員として活動した。

3. 虐待を受ける朝鮮女性の救出に努力（1927-1931）

この時期は1927年に権友会を結成し、1931年に権友会が解消された時期を言う。1927
年5月27日、丁七星は兪珥卿^{ユ・ガッキョン}、黄信徳、許貞淑などと共に新幹会の姉妹団体である「権
友会」結成に参加し中央執行委員、宣伝組織部委員として活動し、7月に中央執行委員長
に選出される。消えない歴史的意味を帯びた女性団体権友会で丁七星は組織の責任者とし
て戦線各地を巡回し、1928年沈恩淑^{シム・ウンソク}、趙元淑^{チョ・ウォンスク}などと共に権友会京城支部を、黄信徳な
どと共に大邱支部を創立するなど外縁拡大に努力した。

大衆の目には女性運動指導者は全朝鮮を自由に行き来しながら爽快な生活をしているよ
うに映ったが、それは見かけだけであり、実状は「ひもじい腹を抱えて歩き回っている」
有様だった。男性批評家たちは、女性運動指導者（権友会中央委員長丁七星氏）にインタ
ビューしながらも、「清らかだが痩せてはいない鶴のような（丁七星）氏」、「椿やつつ
じというより房が大きく長く咲く百日紅とか、香りの強いバラの花というよりこぢんまり
とした梅の花」²³と比喻し、得意の笑みを浮かべた。相変わらず在来の時代に、彼女たち
は、ひたすら「大衆のために個人を犠牲にするその偉大な精神だけを本意」²⁴として持つ
て、非難と困難を黙殺し、険苦を歩んだ。この時期の社会主義女性運動の目標は「現実を
正しく認識する朝鮮女性の覚醒」にあり、これを文章で発表したことや言葉で叫んだこと
でも、丁七星は彼女の名前のように、運動の最前線で道しるべになった。

1929年、丁七星は権友会第2回全国大会準備委員会議案部責任者であり、再び権友会
中央執行委員長に選出された。権友会委員長として全国を巡回し女性の階級意識、抗日意
識を鼓吹させる講演をして数回検挙され、その以後も合法的非合法的闘争に従事し、要監
視人物として当局の監視を受けた。この時期、キリスト教界の人物の何人かが権友会と決
別し、権友会組織に根本的な変化が断行された。丁七星精神は着実に宣伝啓蒙活動と労働
女性の組織化および女子学生運動の活性化を支援し、特に託児所設立などを重点的事業と
して図った。

1930年1月、朝鮮劇場で中学生たちが光州学生運動に対する激文を撒いた事件が起こ
ると、この事件にかかわった疑いで、自分の家に遊びに来た人々と共に京畿道警察部高等
課に検挙されたが、釈放される。同年3月、いわゆる「朝鮮共産党事件」と関連して逮捕、
京城で起きた万歳デモである2次京城学生デモ事件を主導した嫌疑を受けて、再び投獄さ

²³ 「名士のメンタルテスト（1）、権友会中央委員長丁七星氏」、『三千里』2号、1929.9

²⁴ 丁七星、「生活実践に出て泣き笑いする新女性」、朝鮮日報、1928.1.1

れ釈放される。闘争-逮捕-釈放-演説を繰り返す中でも、^{ナグオンドン}楽園洞に刺繍・編物を専業とする小商店「^{フノク}粉玉手芸舎」を開店、手芸品づくりを無料で教え、女性の経済的自立を促した。丁七星は「なぜ髪を伸ばしたのか、それは髪を切ってみると一般の家庭婦人と距離ができたこと」²⁵と言うほど、人生のすべての方向を朝鮮婦人の解放に置いて社会を変化させた。

1930年12月、権友会中央執行委員長を辞職し、民族主義系列の^{チョ・シンソク}趙信聖が中央執行委員長に選出される。1931年、新幹会全体大会で中央執行委員（解消委員）に選出され、新幹会解消後、外部活動を中断し、粉玉手芸舎を運営し生計を維持する。

丁七星は「過去十年にやったこと、将来十年にやること」という『三千里』アンケート調査に、権友会委員長の職責で応じながら、過去十年を社会的・経済的・家庭的に虐待を受けた朝鮮女性を救うために努めた期間と整理する。これは、先にまとめた自分語りとその証拠になるだろう。女性運動の結集のために権友会を結成し、その外縁拡大に全力を注いだ過去の10年は、韓国女性運動史の星のように輝く始まりだった。これまで得た実際の経験をもとに、やりがいのある女性事業に力を入れたいという今後10年間の抱負は、丁七星の強い自分の意志をうかがわせる。しかし「私が引き受けた女性運動の部分だけを堅く守り輝かせるように飾っていこう」²⁶という希望に満ちた計画が色あせるように、この文を発表した1年後、権友会は解体され、多くの民族運動がそうであるように、丁七星の女性運動も不本意な休養期に入ることになった。

4. 雌伏的休養期よ、早く過ぎ去るべし（1931-1945）

当時行われた多様な女性運動は、先駆者的女性たちの崇高な努力にその力を頼っているが、これが円熟した境地で一つに統一されなかったため、多様なイデオロギ的葛藤が潜在していた。丁七星も多くの文章で、団体を維持する最大の障害物として「指導者の地位にある人々が完全に統一されていないこと」²⁷を挙げたが、上記の理由で団体からの女性同志の出入りが多かった。植民期間が続くほど女性団体の円滑な運営が難しくなる状況で一緒に活動したが、今は離れた同志たちに対する懐かしさ、あるいは全盛期に対する思い出を思い浮かべる文がよく目につく。

マスコミは、女性社会主義者たちがやむを得ず休眠状態に入った1930年代半ば～後半の彼女たちの日常に関心を持った。「社会の第一線で華麗に活躍した女性たちの最近の心

²⁵ 丁七星、「私はなぜこうなったのか、私はなぜ再び長髪にしたのか」、『別乾坤』47、1932.1

²⁶ 「過去十年にしたこと、将来十年にすべきこと」、『三千里』、1930.1

²⁷ 丁七星、「先駆女性の新年新気炎：女性運動に対する抱負、指導者統一が急務、固い信念を持とう」、東亜日報、1928.1.1

境」²⁸を打診する移動座談会を開いたり、手記などを依頼して彼らが現在感じている心境をのぞいた。

社会主義女性運動を情熱的に遂行した時間（約10年）より長かった雌伏期（約15年）に、丁七星の自分語りは過去の華麗な時代に対する懐かしさを吐露したり、自分の人生と思想がこのまま終わることはできないという切迫感を表わしている。名高い8人（ファン・シンドク 黄信徳、ホ・ジョンソク 許貞淑、ウ・ボンウン 禹鳳雲、チョ・ウォンスク 趙元淑、シム・ウンスク 沈恩淑、カン 姜アグンニア、チョン・ジョンミョン 鄭鍾鳴、チュ・セジュク 朱世竹、イ・ヒョンギョン 李賢卿、ヒョン・グオク 玄桂玉）の女性たちと共に「錚々たる」時代を後にして主婦になったり、都落ちしたり、消息不明の仲間たちに対する切ない気持ち、ソウルに一人残された自分の境遇が心を苦しませる。

しかし、丁七星は自暴自棄の状態にだけとどまっておらず、新たな可能性に対する期待感を示している。「たとえ流れる時代の力にすべてが去ったとしよう。この地の上で音もなく流れる歴史に包まれて、私たちの時代もさっと過ぎてしまうのだとしよう。（中略）互いに皆落胆せず、勇気を出して時代の状況を見極め、これまで苦闘に耐えてきた体を充実させよう。いくら活動家でも昼夜を問わず走り回ることができようか、休養期が必要だ²⁹」。一つの時代は過ぎ去った。組織も運動も人々も皆解消されたが、過ぎ去ったことに切なく思う必要はなく「私たちの体にも心にも新しさがわいて、再び復活しなければならぬ。残っている仲間たちも少しも落胆せず、この地にすべての花を咲かせることに力を入れてくれ。」³⁰学生時代や権友時代は実に元気いっぱいだった時代だったが、だからといって今がその熱と力が永遠になくなったとか減ったというわけではない。だから今この時間は終わりではなく、もっと遠くへ走るために時を待つ雌伏期なのだ。

丁七星は権友会解消以後、雌伏期に朝鮮日報記者として1年間活動し、健康上の問題³¹で退社した後、キョンソン 京城、ピョンヤン 平壤、テグ 大邱、トンヨン 統営など全国を回りながら編物講習で生活した。当代の新聞・雑誌のアンケートに応じた丁七星の職業が「朝鮮日報記者」になっていた³²。「ジャーナリズムを通じてでも、可能な範囲内で朝鮮女性のために私の微力で支えることになった」というインタビュー³³、丁七星が記者として書いた文が問題になって抗弁書を雑誌に寄稿したこと³⁴は確認できるが、実際に丁七星が朝鮮日報記者として活動した履歴

²⁸ 「その前日、社会第一線上で華麗に活躍した諸女史たちの最近の心境」、『中央』、1935.1.

²⁹ 丁七星、「同志を思う」、『三千里』7巻3号、1935.3

³⁰ 丁七星、「青春を惜しむ佳人哀史：名号不復還」、『三千里』17巻3号、1935.3

³¹ 丁七星はもともと体が弱かったようだ。丁七星の近況を伝えた当代の色々な雑誌によれば「また病気になってあの健康では権友会の仕事をするのが難しく、しばらく大邱の故郷の家に療養」に行ったとか「丁七星氏を見ればどうぞ元気でいてほしい」と思う風聞家の願いがたびたび確認される。（「風聞帖（三）」、『別乾坤』31号、1930.88；「京城有名人「蕩影」録」、『別乾坤』34号、1930.11.）

³² 「三千里機密室」、『三千里』、七巻八号、1935.9；「気になるあの人のその後」、『三千里』8巻11号、1936.11.

³³ 丁七星、「女流文章家の心境打診、「現実」を凝視しようとする女流評論家」『三千里』7巻11号、1935.12

³⁴ 丁七星、「俄館その戦術のさまざまな面」『三千里』7巻7号、1935.8

は新聞を通じて確認できない。ペンネームや号を使ったのではないかと判断されるが、この部分は研究的補充がもう少し行われなければならない。

5. 我が兄弟姉妹は勇敢に立ち上がって (1945-1958)

丁七星にとって雌伏期が思想の転換や挫折の時間ではなかったことは、解放二日後の全国婦女同盟創立大会に姿を現したことから知ることができる。解放の三日後、1945年8月17日、全国婦女同盟創立大会は、農村部に属し、農村女性に対する啓蒙と利益を擁護する活動を始める。9月に臨時政府および連合軍歓迎準備会実行委員となり、朝鮮共産党慶北道党の婦女部長に選出、10月に左翼系女性団体である朝鮮婦女総同盟（以下、婦総）の中央執行委員および副委員長に推戴された。1946年に民主主義民族戦線の中央常任委員兼組織部次長になったが、1947年に「8.15暴動陰謀事件」に関与し、米軍政に検挙される。以後、越北して1948年南朝鮮人民代表者大会で1期最高人民会議代議員に選出、朝鮮民主女性同盟副委員長を歴任した。

この時期の丁七星の活動は、息子のイ・ドンスとの力学関係を通じて明らかになる。当時、雑誌に掲載された記事や一緒に活動した社会主義運動家の評伝や回顧録によると、丁七星に息子がいたことが確認される。「丁七星女史も彼女の愛児が東京に留学中だが³⁵」、というゴシップ欄の漫評や解放日報の記者だったパク・ガプトン氏は、「朴憲永氏は運転手の隣に6尺の巨体の健やかな青年を必ず連れていたが、この人が最近言われるところのボディガードのイ・ドンスだった。（彼は）丁七星の一人息子で柔道が3段で、力持ちだった³⁶」と記している。

【私が良いと思う男】という文によると、丁七星は「志が同じで主義が同じ男性」、「同志として義理と道徳を守る男性」³⁷に対する好感を吐露するが、これを通じて同じ運動に身を投じた男性との関係で息子（イ・ドンス）を産み、その息子を苦勞して東京留学まで行かせたものと判断される。許貞淑の回顧によると、イ・ドンスは母親が運営していた粉玉手芸舎で雑用を手伝い、以後息子の東京留学費が不足してカヤグムを再び調律することを考えるほど母子の情は篤かった。後に息子は母親の思想に同調して朝鮮共産党の責任者である朴憲永の秘書になり、朴憲永が越北する時に傍らで共に行動した。これは丁七星が雌伏期に地下に隠れていた朴憲永側と持続的な交流があったものと推測できる。この時期、丁七星は積極的に政治活動を遂行し、3年後に越北したため、随筆や回想記形態の自分語りは発見されないが、論説の合間に自分の状況に対する言及や理解を望む部分から、これを補充することができる。

³⁵ 「機密室、我が社会の諸内幕」、『三千里』10巻11号、1938.11

³⁶ 而丁 朴憲永全集編集委員会著、「私の知っている朴憲永」、『而丁 朴憲永全集』、歴史批評社、2004。

³⁷ 丁七星、「男、私がいいと思う男-私の好きな五色男」、『別乾坤』19号、1929.2

丁七星の越北後の人生は 1955 年に朝鮮平和擁護全国民族委員会副委員長に選出され、1956 年に朝鮮民主女性同盟副委員長に被選、労働党中央委員会候補委員、1957 年に最高人民会議第 2 期代議員として活動し、1958 年の反宗派闘争当時、反革命事件に関与して肅清されたことが確認される。

III. 私はこの仕事をしたい、自叙伝書き

1. 二つの社会主義（社会主義、絲繪主義）の連帯

1923 年、社会主義思潮が急速に広がり、女性運動界にも社会主義女性解放論が流入し始め、1924 年、その影響で韓国初の社会主義女性団体である朝鮮女性同友会が結成された³⁸。朝鮮女性同友会は、新社会の建設と女性解放運動の働き手養成を綱領として組織された最初的女性団体であるだけに、女性労働者層に深い関心を傾け、丁七星は大邱地域の代表者格として同友会に参加し、女性労働者に直接対面する現場活性化に注力した。

丁七星の反資本主義・反ブルジョアジー活動は、自らが創立・発起した朝鮮同友会、権友会の綱領に従って社会主義女性解放論の一環として展開された。社会主義女性解放論は、女性の人生は階級によって決定されるため、絶対多数を占める無産女性の完全な解放を要求した。女性の解放は経済的独立が根本だという経済的・階級的観点から男性従属に対してより、生活様式を対抗の対象とした。

丁七星は、『批判』の創刊号に載せられた「女性からみた世界観」で資本主義を歴史哲学的観点から批判する。古代の未開の神秘的な世界観から始まり、唯一神の絶対権力を理念とした中世キリスト教精神が資本主義の到来と共にブルジョワジーの世界観を形成し、このようなブルジョワジーの世界観は絶対的支配関係において成立したと見た。未啓蒙の民衆を宗教で惑わせ、生産機械を独占して生活を搾取する資本主義に対抗できるのは「科学的根拠と経験と実践を基調としたプロレタリアの世界観」であることを主張する。

丁七星は、マルクスの弁証法的唯物論こそ、昨今の朝鮮で唯一の哲学であることを示すことで、社会主義路線を標榜する。この文の末尾に「プロレタリアの一属性である女性としての世界観は当然前述のプロレタリア世界観と合流し一致するだろう」ということから「もし女性の特異な世界観があるならば、それは異端的偏見や主観の罨への転落」であることを標榜し、女性解放以前に階級解放を先取りしようとした社会主義女性運動の基調に従っている³⁹。

³⁸ 国史編纂委員会、『韓民族独立運動史資料集』52、国学資料院、2002

³⁹ 丁七星、「女性として見た世界観」、『批判』創刊号、1931.5

また、「やりたいこと」に関するアンケートで、大工場を設置して朝鮮の失業者を全て受け入れるが、工場の生産で労働者と利益を分かち合いたいという意図は、反資本主義的発想に依拠した社会主義路線を堅持していることが分かる⁴⁰。

丁七星は、女性労働者解放の第一段階は経済的独立にあると考えた。女性が男性に従属せず、新しい両性関係を獲得するためには経済的独立が前提でなければならないが、男性中心の家族制度を越えて経済的独立を得ることは資本主義社会では不可能であるため「無産者の解放なしには婦人の解放もない」という社会主義思想を先行させた。

生活の方便としての経済的独立は丁七星も例外ではなかった。丁七星は権友会執行委員長まで務めた当代の有名な社会運動家だったが、彼女もまた日常の荷物を背負った植民地で生きている職業女性だった。丁七星は自分の特技を生かして、楽園洞京城女子消費組合の隣に刺繍と編物を専業とする「粉玉手芸舎」を開店し、編物講習会を開き、朝鮮女性の経済的自立を助けた。

丁七星を研究した先行研究を見ると、丁七星の編物講習は、権友会の解消以後これ以上社会主義女性運動を持続できない状況で選択した生活の方便のように見えるが、実際には、丁七星の編物講習および朝鮮女子職業社編物部の教師生活は、権友会の結成時期と軌を一にしている。当時、雑誌で丁七星を「裁縫の先生」と呼んだり⁴¹、2つの社会主義（社会主義、糸繪主義）を得た⁴²と評していることから、これが分かる。

丁七星は、女性解放の先決条件が経済的独立にあると信じていたので、編物と刺繍は女性たちの職業になって経済的独立ができる手段になると考えた。二度目の日本留学の時、技芸学校で編物と刺繍を勉強した丁七星の履歴と以後の編物講習会は明らかに経済的自立の実践のためのものであることを、ゆえにもう一つの形態の理念運動であることを推察させる。

2. 強烈な階級意識を持つ無産女性のための啓蒙運動

丁七星の最初の論説は、二度目の東京留学の際、在東京朝鮮女性思想団体「三月会幹部」の資格で「朝鮮日報」に投稿した「新女性とは何か」という文章だ。すでに東京雄弁界の独歩的な位置を占めていた丁七星は、多くの弁論原稿を書いた経験を持っており、最初の論説であるにもかかわらず躊躇なく自分の意見を表明する。当時、似非新女性が溢れる中で、真の新女性は反封建と反ブルジョア理念に基づき、「すべての不合理な環境を否定する強烈な階級意識を持った無産女性として新しい環境を創造しようとする情熱のある新し

⁴⁰ 丁七星、「私はこんなことがしたい：失業者のために大工場設置」、『彗星』、1931.4

⁴¹ 「名男名女 年末隠し芸余興競技大会」、『別乾坤』10、1927.12

⁴² 「権友会解消の声がしてからやることがない彼女は、毛糸編物と刺繍で暇つぶしをしている。これからは糸繪主義への転換か。」「風聞帖」、『別乾坤』、1934.1.1

い女性」⁴³と力説した。これとの連続性の中で「真の自由」は女性の教育や啓蒙そのものにあるのではなく、鮮明な階級意識の下で性差別撤廃運動を通じて獲得されるものと見た⁴⁴。

強烈な階級意識を持つ無産女性に対する関心と啓蒙活動は、権友会執行委員長になってからさらに猛烈に推進される。雑誌「権友」は権友会の綱領を紹介し、連帯及び周辺勢力の拡大に向けて丁七星が意欲的に推進した事業の一環であった。『権友』創刊号に掲載された文章で、丁七星は女性の人生を「快適な運命」（有産階級）と「悲惨な運命」（無産階級）に二分し、有産階級の女性が夫のアクセサリーとして享樂を享受する一方、無産女性は賤しく扱われ、貧困に苦しむ哀れな運命に置かれていると批判する。特に農村女性と都市の労働者女性の暮らしの悲惨さを一つ一つ言及し、無産婦人女性が労苦、暗黒、貧困から抜け出すためには階級的団結と覚醒だけがあるのみだと強調する⁴⁵。丁七星はこの文を通じて、社会主義女性解放運動においてジェンダーと階級の間を規定し、女性と通称される集団の解放ではなく、特に無産階級女性の解放を明確に進める方向に設定している。

社会主義女性解放論は、階級解放と女性解放を同一視し、既存の女権論から疎外されていた大多数の無産女性の生活を重視し、彼らを女性問題解決の主体に格上げした。丁七星は、女性解放のための明確な主体であり、新しい真の新女性像として煙草、製糸、紡織工場で働く勤労女性を提示した。彼女らの血と汗は、新生を開拓する動力であり、未来を約束する信号だということだ⁴⁶。

丁七星は大衆の奥深くに浸透し、女性意識の啓蒙および現実生活における改善方向を持続的に表明した。このような理由から、一緒に活動した女性の先覚者や運動家の政策に相当な不満を吐露しているが、婦人問題座談会に集まった著名な女性たちが生活の合理化という名目で掲げたものが、果たして朝鮮人の不合理な生活を消し去る合理的な生活方策なのかを疑い、階級的平等が前提とされていない合理的な生活は不可能であることを語る⁴⁷。

丁七星は、女性が解放されるためには封建制を打破しなければならないが、そのためには女性が啓蒙されなければならないと信じた。丁七星たちが権友会の代表格として全国を巡回しながら演説した主要テーマが、まさに女性教育と現社会での女性の役割だった。当時、韓国の女性運動は、社会の改造、新文化の建設の中で女性の覚醒と開発が広範に要求される水準であったため、無知な女性たちを目覚めさせ、生活の向上と人格の完成のためには、何よりも女性自らの自覚によって自らの力を成就させるための女性啓蒙と教育を先決課題とした。

43 丁七星、「新女性とは何か」、『朝鮮日報』、1926.1.4

44 丁七星、「真の自由の道」、『女子界』続刊4号、1927.1

45 丁七星、「意識的覚醒から：無産婦人生活から」、『権友』1巻1号、1929.5

46 丁七星、「新女性の新年新信号：未来を見つめる婦人労働者」、『東光』29、1931.12.27

47 丁七星、「人形展覧会を見て-新東亜十一月号収録」、「新階段」、1933.1

丁七星は「屏風の中に描いた鶏」のような家庭的義務と急変する現代社会が女性に要求する社会的義務の間で、家庭が「小」ならば社会は「大」なので、この二つの調和が不可能ならば「家庭を飛び出さなければならない」と強調する⁴⁸。この文でもう一つ注目すべきことは、蛇足のように付けた最後の言葉だ。「一般の先覚女性は個人の享楽だけに気を使わず、愚かな仲間のために奮闘し責任を持たなければならない」と指摘するが、これは権友会の内部的葛藤を表出したものと見られる。丁七星は権友会が創立されたことに高い意義を置くが、組織がより強固に団結するためには指導部統一が急務であることを強調した経緯がある。指導部の対立の具体的内容は表面化しなかったが、脱却すべき第一の思想として「封建的思想」に言及したこと、後に他の文で封建的思想の代表として迷信を指摘し、無知と迷信の結合が今日の朝鮮半島の女性を不幸にさせたと言及する⁴⁹。

再び迷信を二つに分けてみる時、儒教的歴史から始まったものと甘言異説で神の意思を追いかけさせるもの（キリスト教）を含めた。この二つは、権力があり、お金のいる階級の富貴栄華のために、権力がなく、お金のない階級の大衆を教え、たぶらかす迷信だと言った。今からでも私たちが一切の迷信を捨てることは私たちに圧迫する階級を壊してしまうことであり、これを可能にするのが「科学」だと言った。「科学の顕微鏡を通じて迷信の土台を探り、掘り出してその中毒を避けなければならない」というのだ⁵⁰。

丁七星は権友会の公式的な「口」（演説）と「手」（論評）だった。社会主義女性解放論に立脚して政見を躊躇なく語っていたこの時、注目すべき新しい地点は、先に述べた自己叙事と関連して「母の丁七星」だ。許貞淑、朱世竹、鄭鍾鳴など社会主義女性解放運動を共に導いた人物の恋愛、家庭史が比較的詳しく光を当てられたのに対し、丁七星は依然として空白として残っており「母親として」の座はより一層そうだ。社会運動をするにあたって、女性・「個人」の人生は常に大衆の関心事だった。20代前半まで解語花の人生を生きてきた丁七星は、すでに世間で嘲弄と賛嘆の対象だったため、これ以上自分の個人史が露出することを潔癖症を示すほど嫌がった。このような理由で「母親としての丁七星」は表面に出ることも注目されることもなかった。

だが、袋の中の錐のように、表に出せなかった母性は自然に「子ども」の問題に対する関心につながる。中外日報で1929年を締めくくる意味で設けられた家庭婦人の座談会に出席した丁七星は、家庭生活と関連した各方面の話題（家庭制度、衣食住、離婚問題、育児問題）で、児童に関する問題においてのみ唯一意見を述べている。例えば、新聞の児童欄が童話の他に、現実の生活と重なり合って干渉が起きる話を載せ、児童たちに教育的効果を高める必要があること、女性の職業関係から見て産児制限が必要だということなどがそれだ⁵¹。

⁴⁸ 丁七星、「『赤い恋』批判、コロンタイの性道徳について」、『三千里』、1929.10

⁴⁹ 丁七星、「時評、婦人と迷信」、『三千里』9巻4号、1937.5

⁵⁰ 丁七星、「1932年を迎えて朝鮮新進女性の抱負と主張、階級的に欺瞞する迷信を清算する、特に女性大衆へ」、中央日報1932.1.2

⁵¹ 「本社主催の家庭婦人座談会」、中外日報1930.11

子どもたちの教育において依然として 18 世紀の教育に留まっていることを批判し、実際の生活に相応する現代教育が行われるべきであることを強調するとともに、国民の社会的身分や経済的地位の差別なく、その能力に応じて教育を受ける権利を認め、教育の機会均等思想に基づいた「義務教育制度」の実施を表明することは、丁七星に先見の明があることを示す⁵²。これは、母性愛に対して批判的ではなかったが、コロンタイの見解を受け入れ、国家と社会が母親の役割を遂行し、家事労働を分担して女性を家庭から解放させようという見解とも一脈相通じるものがある。

子どもの教育と共に、子どもを指導する教育者もまた「文字だけを教える教育者」にならず、まずもって自己完成に努めて、学生たちの模範にならなければならないことを強調する。人間的常識と教養を教える教育、これが矛盾のない教育なのだ。

丁七星は解放以後、朝鮮婦女総同盟、朝鮮民主女性同盟の口と手となって社会的 이슈ーや政治的問題に対する組織の立場を代弁するにあたり、特に当時の女性関連問題について積極的に意見を開陳した。毎年（1946~1947）3月8日に「国際無産婦人デー（婦女節）の由来」を語り、ソ連婦女たちの英雄的闘争精神にならって婦女解放と救国闘争のための決意を新たにしたり⁵³、男性たちが妻の啓蒙に努めるとかいうような⁵⁴、植民地時代から続いた女性啓蒙運動の論調を引き継いでいった。この他にも公娼廃止令、三相会議、カイロ会談、米軍の蛮行事件など社会的問題に対して積極的に声を上げるが、女性を侮辱し、賤しく扱われる社会像を批判し、これが改善されない場合、「一千五百万女性の名で」これを許さないという闘争の声を高めている⁵⁵。

3. 慶尚北道から全朝鮮へ、外延拡大としての地域の価値認識

丁七星は東京留学を終えて 1923 年から故郷の大邱に戻り、本格的に社会運動に身を投じる。異色であるのは京城ではなく故郷である大邱に向かったということだが、これは彼女が社会運動の開始点として、運動中央である京城ではなく大邱の地域社会を選択したことを意味する⁵⁶。丁七星の社会主義女性運動の出発は地域単位であり、地域を媒介に外縁

⁵² 丁七星、「教育者の皆様へ一言」、東亜日報 1934.12.10；丁七星、「将来のための新年の贈り物、子どもに贈る大人の言葉：生意気になろう」、東亜日報 1931.1.2；丁七星、「実生活に適応した教育を」、『対照』2号、1930.4

⁵³ 丁七星、「国際無産婦人デー由来（上・下）」、独立新報、1947.3.6-8；丁七星、「女性解放の道を探そう（上・下）：婦女節を迎えて」独立新報、1948.3.7-9

⁵⁴ 丁七星「女流革命家を探して、朝鮮の夫たちよ、女性啓蒙に励んでいるのか？ 丁七星編」、独立新報、1946.11.14

⁵⁵ 丁七星、「公娼廃止令と社会波紋：抱え主の陰謀粉砕 婦総丁七星氏談」、漢城日報、1946.5.28；丁七星、「婦総丁七星氏談：全女性の名において反対」、現代日報、1946.6.6；丁七星、「朝鮮婦女に対する米軍の蛮行事件について」、『婦人』2巻2号、1947.3.1；丁七星、「必ず女権擁護に全力、民主女性同盟丁七星氏談」、『女性新聞』、1947.6.18

⁵⁶ パク・スンソプ、前の論文、250 ページ

を拡張しようとした。丁七星本人は、運動の主体として、「草の根」の地域主義女性だった。草の根は、生活に接触している女性個人であり、イシューは生活の中の課題から出発して何よりも主体形成を強調する概念だ⁵⁷。階級性と女性性を専有する運動主体として、草の根の女性は少数のエリート中心の女性と対比された概念で、社会主義女性運動圏内の丁七星ならではの自尊心だ。草の根運動の主体としてスタートし、運動の大衆化ということを重要な自己課題と考え、多くの女性を運動の中に引き込もうとした丁七星は、女性の階級意識を培うための講演など啓蒙活動に集中し、工場女性、農村女性などに対するたゆまぬ関心などで、植民地時代の地域主義女性運動を先導した。

かなり前から社会主義が普及した地方の先進的女性たちは、女子青年会を通じて結集するようになり、一方で地域の他の運動団体と密接な関係を結び、朝鮮社会主義運動の発展と大衆運動の高揚という当時の大勢に呼応していた。したがって、彼らは女性運動の基本方向を、既存の教育啓蒙的性格から、次第に社会改革的で体制指向的な性格に転換し、改良主義的女性運動あるいは民族主義女権運動と、理念的・組織的次元で分離され始めた。最も代表的な事例が大邱の女子青年会だ。

1923年10月、丁七星の主導で創立された大邱女子青年会は、既存の女子青年会が宗教的、啓蒙的性格から抜け出せないまま、女性運動が微弱な状態に留まっているが、代案として最初から民族主義教育啓蒙運動を批判して出発した。この時期に活発に展開された女性教育啓蒙運動は、講演会や討論会、夜学や講習所を運営する方式が代表的だったが、大邱女子青年会では、ソ・ボクジュ、丁七星、イ・グムジョなどが、女性の実際の生活に役立つ無料編物講習会を開催、大邱地域ならではの特色ある女性運動を展開、大衆講演会や音楽会を開催するなど、日帝時代における大邱初の女性運動団体だったという点で意義を見出すことができる。

その後、丁七星は、朝鮮同友会の結成に注力するが、この時も地域活動家出身としてのアイデンティティ（大邱女子青年会）を維持しつつ、各勢力との連合を図った。朝鮮同友会は、女子高互助会の中の社会主義者たちを中心に、各社会主義分派が連合体的性格を帯びて組織された。特に、鄭鍾鳴、許貞淑、朱世竹などは、女子高互助会の活動力を土台に知識階級を主要組織対象とし、金海の^{キム・ビレ}金弼愛、密陽の^{ユ・ウソンフ}高遠涉、大邱の丁七星、海州のシム・チョンシンなど地方の一部社会主義者を糾合した。彼らは、主に自分の地域の青年女性団体を中心に活動し、1923年頃から社会主義の影響を受け始める一方、女性運動を青年運動との一定の関連下に置き、大衆運動の次元に引き上げようと努力した。当時、大邱の丁七星は一般の婦人を相手に同志獲得に努力した。

丁七星はその翌年「慶尚北道の思想運動は、慶尚北道でなければならない」という趣旨の下、大邱代表として慶尚北道単位の思想団体である四合同盟を結成する。四合同盟の

⁵⁷ キム・ヨンナム「草の根女性運動を通じて見た女性主義市民性の拡張に関する研究」聖公会大学修士論文、2012、p52

綱領が大衆解放、理論と実際の現実的適用にあったので、丁七星は四合同盟の発起人として、保守的基盤で社会運動が微弱だった大邱の民衆解放に注力した。

権友会が重点を置いて実施した事業は、宣伝啓蒙活動と労働女性の組織化、そして女子学生運動の活性化などだった。このような事業を効果的に遂行するためには、全国各地に支部を設立し、講演者を派遣するが多かったが、丁七星は全国を回りながら女性運動論を広め、当代の講演者として有名になった。地域運動に対する彼女の力量と関心は、権友会参加以前に地域社会運動領域で活動した経験と無関係ではなく、長い地域社会運動の経験を持つ丁七星の能力は、権友会組織を全国的に拡大していくのに決定的な役割を果たした。

慶尚北道では1927年の^{キムチョン}金泉を皮切りに1928年大邱、^{クヌイ}軍威、^{ハヤン}河陽、^{ヨンチョン}永川、1929年^{ヨンジュ}榮州で支部が設立された。支部の設立は地域女性たちの自主的な努力と権友会本部の支援および地域の社会団体の協力によって可能になった。本部では支部設立および会員確保のために各地方に講演者を派遣して巡回講演を行い、権友会の趣旨を説明して全朝鮮女性の団結と組織の必要性を鼓舞した。特に慶尚北道地域で権友会の支部が設立された地域には、当時全国的に社会主義活動を展開していた大邱出身の丁七星、李春壽などが影響を及ぼしており、彼らは支部の設立から活動に至るまで主導的な役割を担った。

大邱では1928年2月、権友会大邱支部発起準備委員会を組織し、臨時議長と設立大会準備委員を選出した後、2月25日に支部が設立されたが、大会は大邱女子青年会幹部であり権友会大邱支部準備委員である^{チョ・ヨンス}の司会で進行された。権友会本部から派遣された丁七星が趣旨説明をし、新幹会大邱支部の^{ソ・マンダル}氏の他2人が祝辞を述べた。当日出席した会員は200人余りで、傍聴人を合わせると300人余りの大盛況だった。このような盛況は、大邱出身の女性運動家たちの自主的な準備と努力に加え、権友会本部の支援、新幹会の支持によるものだった⁵⁸。

大邱支部では、婦人夜学や講座、講習、討論会などを通じて婦人および一般女性の識字と教育に努めた。支部ではこのような事業を通じて公娼、早婚、人身売買、迷信などの問題点に対する女性の自覚を促した。これは初期の民族主義系女性の教育啓蒙運動とは異なっていた。権友会運動では女性大衆を教育啓蒙して識字運動をすることに止まるのではなく、これを皮切りに彼らの階級的自覚を引き出そうとし、無産女性自身が運動主体となってその力量を発揮させることに努めた。そこで支部事業の重点を、組織宣伝、調査研究、会員親睦、園遊会開催などに置き、運動の主体となる会員の確保に注力した⁵⁹。

1931年、権友会解消論が台頭した時、丁七星は反対に初心を主張した。各女性運動（労働部門）が一定の段階まで激化すれば、権友会は各階級のために当然解消されなければならないが、いまだに各部門の運動が男性専有の運動のように認識されている今、女性意識

⁵⁸ 「権友大邱支会準備委員会」、中外日報、1928.2.12；「大邱にも権友支会準備に多忙」、朝鮮日報、1928.2.13；「大邱にも権友支会創立大会は21日に」、東亜日報、1928.2.14

⁵⁹ キム・ウナ、「日帝植民地時代の慶北地域権友会運動」、啓明大学修士論文、2011

を促進させるための識字運動のような啓蒙運動とともに、権友運動により大衆的に力を注がねばならないということだ。すなわち、以前の啓蒙運動が概念運動や基本運動だったとすれば、現在の啓蒙運動は現場（農村、工場、家庭）に浸透した意識的、実践的、組織的啓蒙運動でなければならないと強調した⁶⁰。

権友会の解消後も丁七星が、依然として慶尚北道地域に根幹を置いて女性解放論を引き継いでいたことは、解放2日後の全国婦女同盟創立大会で、農村女性の啓蒙と利益を擁護する農村部門に所属し、2ヵ月後に朝鮮共産党慶北道党婦女部長に選出されたことから分かる。

IV. 終わりに

丁七星の生と思想を追跡する作業は、近代社会主義運動史、女性史、文学史、マスコミ史が交差する地点に置かれている。これまで、丁七星の履歴および思想に誠実に光が当てられてこなかったため、本稿は丁七星という社会主義女性運動家の人生を、年代順に構成して調べた。3・1運動以前・日本留学と共に色々な団体を組織し、権友会創立前まで～権友時代～権友会解消以後～解放以後の順に整理し、丁七星の声が生き生きと伝えられるよう彼女の自叙伝から句を直接引用した。丁七星が発表した論評を社会主義、女性主義、地域主義に区分したのは、思想の鮮明性を浮き彫りにするためであり、これを土台に理論と運動を総合化しようとした。

丁七星の人生は、伝統から近代へと進む植民地過渡期を生き抜いた一人の女性のマイクロ史ではない。丁七星自身の存在論的・社会的経験をもとに、現実を冷徹に認識し、闘争的なやり方で当代と拮抗した。これが力強い植民地運動史と重なる時、丁七星の人生は植民地女性史になりうるのだ。さらに丁七星は、人生の目的意識を社会主義女性運動と講演、論評を通じて無産大衆と共感、疎通しようと努力した人物だ。その努力は洗練されていなかったが、少なくとも正直になろうとした潔白な人物だった。疲弊した人生の経験から発生した社会的争点である階級、ジェンダー、組織の問題が強烈な主題意識を生み、それが丁七星という女性革命家の物語を支配している。

⁶⁰ 丁七星「民族的大協同機関の必要の有無とその可能性の如何：闘争は不可能」、『彗星』1巻1号、1931.3

参考文献

1. 一次資料

- 「新女性とは何か」,『朝鮮日報』,1926.1.4
- 「真の自由の道」,『女子界』続刊4号,1927.1
- 「義憤公憤心談構想 最も痛快だったこと：男装して馬を走らせる時」,『別乾坤』8号,1927.8
- 「女性運動に対する抱負、指導者統一が急務、固い信念を持とう」,『東亜日報』,1928.1.1
- 「魂の救済か飛躍の解放か、女性運動は大衆のためだ」,『朝鮮日報』,1928.1.1
- 「男、私がよいと思う男-私の好きな五色男」,『別乾坤』19号,1929.2
- 「意識的覚醒から：無産婦人生活で」,『権友』1巻1号,1929.5
- 「仲間への呼び掛け」,『三千里』1号,1929.6
- 「金持ちもみんな嫌だ。やっぱり今のような働き手で」,『三千里』1号,1929.6
- 「名士のメンタルテスト(1)、権友会中央委員長丁七星氏」,『三千里』第2号,1929.9
- 「各方面名士の祝辞と希望：女性運動に貢献せよ」,『中外日報』,1929.9.29
- 「『赤い恋』批判、コロンタイの性道德について」,『三千里』,1929.10
- 「過去10年に韓日、将来10年にすべきこと」,『三千里』,1930.1
- 「実生活に適応した教育を」,『対照』2号,1930.4
- 「夫の在獄・亡命中の妻の貞節問題、不在中は意識的に行動せよ」,『三千里』10号,1930.11
- 「啓蒙運動に注力」,『朝鮮日報』,1931.1.1
- 「子どもに贈る大人の言葉：生意気になろう」,『東亜日報』,1931.1.2
- 「恋愛の悩みのかたちとその対策」,『朝鮮の光』,1931.1
- 「民族的大協同機関の必要性の有無とその可能性の如何：闘争は不可能」,『彗星』1巻1号,1931.3
- 「私はこんなことがしたい：失業者のために大工場を設置」,『彗星』1巻2号,1931.4
- 「女性として見た世界観」,『批判』創刊号,1931.5
- 「兄妹間の恋愛と血族結婚不可論：不倫と恋愛自由問題」,『三千里』16号,1931.6
- 「問題は大衆の要求を履行するかどうか」,『中央日報』,1931.11.27
- 「新女性の新年新信号：未来を眺める婦人労働者」,『東光』29号,1931.12
- 「私はなぜこうなったのか？ 私はなぜ再び長髪にしたのか？」,『別乾坤』47号,1932.1
- 「階級的に欺瞞する迷信を清算するだろう、特に女性大衆に」,『中央日報』,1932.1.2
- 「人形展覧会を見て-新東亜11月号所在」,『新階段』,1933.1
- 「教育者の皆様に一言」,『東亜日報』,1934.12.19
- 「同志を思う」,『三千里』7巻3号,1935.3

- 「青春を惜しむ佳人哀史：名号不復還」,『三千里』7巻3号,1935.3
「近日遺憾」,『三千里』7巻5号,1935.6
「俄館その戦術のさまざまな面」,『三千里』7巻7号,1935.8
「女流文章家の心境打診、「現実」を凝視しようとする女流評論家」,『三千里』7巻11号,1935.12
「安昌浩氏にどんな舞台を任せたいのか」,『三千里』,1936.4
「著名人物一代記」,『三千里』9巻1号,1937.1
「時評、婦人とミシン」,『三千里』9巻1号,1937.1
「公娼廃止令と社会波紋：抱え主の陰謀粉碎 副総丁七星談」,『漢城日報』,1946.5.28
「副総丁七星氏談：全女性の名において反対」,『現代日報』,1946.6.6
「朝鮮の夫たちよ、女性啓蒙に力を入れているのか。丁七星女史編」,『独立新報』,1946.11.14
「朝鮮婦女に対する米軍の蛮行事件について」,『婦人』第2巻2号,1947.3.1
「国際無産婦人デーの由来（上・下）」,『独立新報』,1947.3.6~8
「必ず女権擁護に全力、民主女性同盟の丁七星氏談」,『女性新聞』,1947.6.18
「女性解放の道を探そう（上・下）：婦女節を迎えて」,『独立新報』,1948.3.7~9

2. 単行本

- カン・マンギル,『韓国社会主義運動人名事典』,創作と批評社,1996
国史編纂委員会,『韓民族独立運動史資料集』52,2002
キム・ギョンイル,『新女性,概念と歴史』,青い歴史,2016
キム・ソンドン,『花束も墓もない革命家たち』,パク・ジョンチョル出版社,2014
キム・ジュンヨプ/キム・チャンスン,『韓国共産主義運動史：資料集』,高麗大学アジア問題研究所,1980
キム・ジュンスン/イ・スミン,『いったい愛は何だというのですか?』,ソトン,2015
大邱史学会編,『嶺南を知れば韓国史が見える』,青い歴史,2005
パク・ヨンオク,『韓国近代女性運動史研究』,韓国精神文化研究院,1984.
ソン・デギョン編,「時代を先取りした人々」,『先人』,2014
シン・ヨンスク,『女性が女性を歌う：日本による植民地時代韓国女性史』,ヌルプムブラス,2015
アン・ジェソン,『失われた韓国現代史』,人文書院,2015
チョン・ウンヒョン,『朝鮮の娘、銃を持つ：大家の奥様から新女性まで、日本帝国に対抗して戦った24人の女性独立運動家物語』,人文書院,2016
チョ・ギジュンほか,『日本統治下の民族生活史』,民衆書館,1971

ピョ・ハンニョル,『(教科書に載せられなかった) エピソード独立運動史』,アルフィー,
ー,2017

3. 記事及び論文

キム・ギョンイル,「1920-30年代韓国の新女性と社会主義」,『韓国文化』36,2005

キム・ジュンスン,「近代化の担持者 妓生」,『韓国学論集』43,2011

キム・ヒョンモク,「丁七星、「思想妓生」から女性運動家に変身する」,『独立記念館』
346,2016

キム・ヒジョン,「大邱慶北近現代人物史 38、丁七星」,永南日報,1997.12.23

ノ・ジスン,「ジェンダー、労働、感情、政治的覚醒の瞬間：女性社会主義者、丁七星の
生活と活動に関する研究」,『比較文化研究』43,2016

パク・スンソプ,「1920.30年代丁七星の社会主義運動と女性解放論」,『女性と歴史』
26,2017

朴貞愛,「3.1独立運動に飛び込んだ「思想妓生」社会主義運動家として活動」,『ハンギ
ョレ』,2008.8.16

パク・ヘラン,「1920年代社会主義女性運動の組織と活動」,梨花女子大学修士論文,1993

宋連玉,「山川菊江、黄信徳：帝国日本と植民地朝鮮の女性リーダーの出会いとすれ違
い」,『女性と歴史』15,2011

シン・ヨンスク,『日本の韓国女性社会史研究』,梨花女子大学博士論文,1989

ヤン・マンウ,「権友会抗日武装組織的女性運動主導(独立運動秘史 11)」,『朝鮮日
報』,1995.8.5

チャン・ヨンウン,「生存と執筆：女性社会主義者の自己叙事」,『比較韓国学』,2017

チャン・インモ,「1920年代権友会本部社会主義者たちの女性運動論」,『韓国史研
究』,2008

チェ・セジョン,「女性、社会運動家 丁七星」,『毎日新聞』,2015.6.15

ホン・ヤンヒ,「韓国女性人物辞典、丁七星」,『イートゥディ』,2017.7.27